

# わが国の唱歌教育について

## —— 唱歌教育の創設から昭和初期まで ——

山下 恭子

### Choral Singing Education in Japan — from its beginnings to the early *Showa* period —

Kyoko YAMASHITA

#### 1. はじめに

唱歌ということばは平安時代、楽器（一節切など）の音を口で唱えることを“しょうが”といていた。しかしここでいう唱歌は学校で教える歌のことをさす。明治期に教科目として設定するとき、おそらくこの“しょうが”ということばを参考としたのではないだろうか。今日ではなつかしい歌として、日本人の心に深く入り歌い続けられている。勿論今日の教科書にも“ふるさと”“もみじ”“おぼろ月夜”など載せられている。

筆者は、唱歌教育がどのような困難さを伴い創設されたか、その後唱歌教育がどのようになされていったのか、唱歌ということばがなくなる昭和初期までの音楽教育について考察してみたいと思いこのテーマを設定した。

#### 2. 唱歌教育の創設と伊沢修二

明治5年学制が公布され、「邑に不学の戸なく家に不学の人なからしめん事を期す」という国民皆学をめざし近代学校の出発となった。それまでは武士の子弟は藩校で、町民の子弟は寺子屋で教育を受けていたのである。明治政府は欧米の文化を取り入れ、後進国からの脱却をはかろうとしたのである。学制はオランダやフランスの学校法を模倣したということである。学制により小学校の教授内容が明示された。それによれば、綴字（カナツカイ）、習字（テナライ）、修身口授（ギョウギノサトシ）洋法算術（サンヨウ）などが見られる。しかし音楽は唱歌として位置付けられるが、「当分之ヲ欠ク」とした。それは教材がないことや指導者がいなかったという問題があったからである。唱歌を教育上重要として科目にいったのはどうしてか、西洋諸国に科目として、設定されていたから模倣したのか。資料によれば儒教における礼学のなかのものをもって教科に設定したのではないかとの見解も見られる。

明治8年当時愛知師範学校長の伊沢修二は文部省から師範学校取調べのためアメリカ留学の命

をうけ、ボストン郊外のブリッジウォーター師範学校へ入学した。伊沢は留学前の愛知師範学校時代の明治7年、告諭の中で「…故ニ唱歌体操ノ科以テ精神ヲ健快シ材幹ヲ長成シ支体ヲ強壯ニス之ヲ身体ノ教育ト云…」と述べ、唱歌・体育を重視している。また彼の教育意見書「将来学術進歩ニ付須要ノ件」の中の「唱歌嬉戯ヲ興スノ件」で、「唱歌ノ益タルヤ大ナリ、第一知覚心経ヲ活發ニシテ精神ヲ快樂ニス、第二人心ニ感動力ヲ發セシム、第三發音ヲ正シ呼法ヲ調ブ、以上ハ幼生教育上唱歌ノ必欠ク可ラザル…」と述べ、下等小学には嬉戯を設けるべきであると主張している。そして唱歌と嬉戯の例をあげている。たとえば「椿」の例をみると

(一) 椿

唱歌

「椿ヤ椿、椿ノ花ガ開イタ。中ノ心マデ開イタ。椿ノ花ハ、萎ム時モアラウガ…」

技態

「此戯ハ群児五分ノ一ヲ椿ノ花ノ心トシテ中央ニ蹲マラシメ、相互ニ手ト手ヲ連ネ…」

以上のように詳しく述べている。これは唱歌と嬉戯を大変重要視していた伊沢自身のオリジナル唱歌嬉戯ではないかと考える。このように伊沢は音楽教育に対し、強い関心を抱いていた。それゆえアメリカへの留学が決まった時点で音楽の勉強も頭であり、音楽施設を造る構想を練っていたということである。

アメリカ留学中の伊沢は音楽の科目は得意とするはずだったが、ソルフェージュの面で苦しんだということである。ボイデン校長はアメリカと日本は事物が違うように、音楽も違うのは当然である。この科だけは免除してやろうといったそうだが、伊沢は免除してほしくない旨をいって学習したという。何が問題だったかという、半音の音程をとるのが難しかったらしい。それはなぜだろうか。日本の伝統音楽は五音音階でできている。つまり半音を含まない曲で、今日ではヨナぬき音階ともよばれている。伊沢の留学前までは、ほとんど五音音階でできている曲しか耳にすることができなかったことは当然だったと思われる。そこでボストンの初等学校監督兼教師のメーソンについて勉強し、音楽を習得した。アメリカで習った「ドレミファソラシド」は、とうてい日本の子どもたちには歌えないと考え「ヒフミヨイムナヒ」の歌い方を考えたということである。これは後でヒフミ唱法となった。アメリカ留学での体験がとても貴重なものとなり、音楽教授法をどうしても確立しなければならないという強い義務感を抱き、留学生監督官の目賀田種太郎と文部省へいくつかの文書を提出した。それらは次のとおりである。

- (1) 「学校唱歌ニ用フルベキ音楽取調べノ事業ニ着手スベキ、在米國目賀田種太郎、伊澤修二ノ見込書」(明治11年4月)

これは欧米においては音楽が教育の一課である。音楽は児童の気持ちを爽快にして肺臓など強くし、音声や発音を清く正すなど音楽の効用について述べている。

- (2) 「我公學ニ唱歌ノ課ヲ興スベキ仕方ニ付私ノ見込」目賀田種太郎(明治11年4月)

これは唱歌を興すにあたって、まずは東京師範学校と東京女子師範学校にこの課を設けること、メーソンを招聘することが必要であること、必要な楽器などについて述べている。

## (3) 「唱歌法取調書」伊沢修二 (明治11年6月帰国後)

これは唱歌掛図について述べ、唱歌法凡例を挙げている。

## (4) 「音楽傳習所創設議案」(明治12年3月)

音楽伝習所創設のための経費について述べている。

## (5) 「L・W・メーソンと目賀田種太郎との條約書」英文・和文 (明治12年6月)

メーソンの任期、給料、教授時間など10条から成っている。

以上のような手続きを終え、明治12年10月音楽取調掛として音楽施設が設置された。

音楽取調掛はわが国最初の音楽教師養成機関となったわけである。初代の掛長は伊沢修二で、伊沢は東京師範学校の校長も兼務することとなった。

明治14年に作成された伝習生のためのカリキュラムは唱歌、唱歌教授法、和声学、ピアノなどとなっている。和声学などいままでの日本の音楽になかったものを理解することは伝習生にとって相当努力を要したのではなかったかと察する。ピアノはバイエル教則本を使いメーソンから直接レッスンを受けたということである。メーソンは20冊のバイエル教則本をアメリカから持ってきた。今でもピアノの本といえばバイエルとだれでも知っている。バイエルのルーツにもなったわけである。

伊沢修二の帰国後の大きい課題は教材作りであった。伊沢は①和洋折衷して新しく教材をつくる。②音楽を教える人物を養成する。③諸学校に所定の音楽を実施する。という三大計画を提案した。明治13年メーソン来日と同時にその仕事にとりかかり、三大計画にそって「小学唱歌集」に着手した。「小学唱歌集」の編集は、実に大事業であったことは察しがつく。

メーソンがわが国に来てから、わが国の俗楽や雅楽を聞かせたところ、不思議なくらいスコットランドの曲に似ている点がわかり、スコットランドの曲をいくらか採用した。スコットランドやアイルランドの民謡は5音音階（ペントニック）でできており、それまで培ってきた日本人には受け入れやすいものであった。いまでもスコットランド民謡「蛍の光」やアイルランド民謡「庭の千草」は愛唱されている。授業では「唱歌掛図」を使い、子どもたちが集中できるような形としたこともアメリカ留学の成果であった。

「小学唱歌集」は児童1人ひとりが手にすることができるように配慮して刊行することになった。教科書を1人ひとり持つことの意義は大きい。唱歌集に載せる曲は提出された詞を何回も改作し吟味して決定し、東京師範学校附属小学校や東京女子師範学校附属小学校で実験をしてまとめられたものである。1曲に費やす労力は計り知れないものだったに違いなかったと思われる。

「小学唱歌集」は3編刊行されたが、初編は明治14年刊行された。「小学唱歌集」の緒言には「凡ソ教育ノ要ハ德育知育體育ノ三者ニ在リ而シテ小學ニ在リテハ最モ宜シク徳性ヲ涵養スルヲ以テ今夫レ音楽ノ物タル性情ニ本ツキ人心ヲ正シ…」

となっており、徳性の涵養には音楽が適していると述べている。

「小学唱歌集 初編」には33曲が載せられている。第一曲は「かをれ」で作詞は稲垣千穎である。次にこの「かをれ」の楽譜をみると（譜例1）のようになっている。

(譜例 1)

第一

カ オ レ ニ オ エ

ソ ノ ウ ノ サ ク ラ

これは 2 度の音程でできていて、リズムは単純である。第二曲は音程が 3 度までひろがっている。

次に第十三曲、ルソー作曲、柴田清熙・稲垣千穎作詞の「見わたせば」は今日歌われている「むすんでひらいて」である。(譜例 2) と (譜例 3) で「見わたせば」と「むすんでひらいて」の一部を比較してみれば、拍子、調子は違うもののメロディが同一であることがわかる。

(譜例 2)

第十三

ミ ワ タ セ バ ア オ ヤ ナ ギ

サ ホ ヒ メ ノ オ リ ナ シ テ

ハ ナ ザ ク ラ コ キ マ ゼ テ

フ ル ア メ ニ ソ メ ニ ケ ル

(譜例 3)

むすんでひらいて

♩=100  
D A D 文部省唱歌

む す - ん で ひ ら い - て

て を - う っ て む - す ん で

Fine

このように今日歌われている曲で、メロディーが同じでも曲名が違うのは多く見られる。

その他今日まで歌われているものに「蝶々/スペイン民謡」, 「うつくしき/スコットランド民謡」, 「蛍 (蛍の光)/スコットランド民謡」などがある。

「小学唱歌集 初編」全曲をみると、拍子は2/4, 4/4がほとんどを占めているが、「蝶々」だけは4/8拍子でできているのがおもしろい。いつから今日のような2/4になったのだろうか。調子はハ長調がもっとも多く、ト長調, ヘ長調, ニ長調の曲も見られる。旋律は単旋律である。

「小学唱歌集第2編」は明治16年3月に刊行され、13曲掲載されている。ここに載せられている曲でいまも歌われているものをあげると、「鳥の声 (さよなら)/ドイツ民謡」, 「霞か雲か/ドイツ民謡」などである。「小学唱歌集第2編」全曲をみると拍子は4/4が多いが、6/8拍子や2/2拍子の曲が見られる。調子はハ長調が少なく、ヘ長調, ト長調, ニ長調, イ長調となっている。旋律は単旋律である。

「小学唱歌集第3編」は明治17年3月刊行され、42曲掲載されている。「あふげば尊し」「才女(アニーローリー)/スコットランド民謡」「船子 (Row your Boat)」「小舟 (モーツァルト作曲「魔笛」パパゲーノのアリアから)「菊 (庭の千草)/アイルランド民謡」などなじみの曲がみられる。「小学唱歌集第3編」全曲を見ると、拍子は2/4, 4/4, 3/4, 6/8。調子は変ホ長調, 変イ長調の他、ホ短調, ニ短調, ヘ短調, ト短調などこの唱歌集には新に短調がでてきているのが特徴的である。旋律は単旋律のほか、二部合唱、三部合唱、二部輪唱、三部輪唱、四分輪唱とハーモニーを学習するようになっている。

「小学唱歌集初編, 第2編, 第3編」に目を通して見たが、はじめて刊行された教材としては豊富な内容を含んでいると思う。これらの歌詞については徳育をモットーとするがゆえに前述したように多くの検討がされたということが文献により伺えた。この唱歌集は外国の曲に日本語をつけた曲が多くあり、それゆえ批判もあったようだが、筆者は明治初期に外国の曲がこのような形で紹介されたことは意義深いと考える。

また「小学唱歌集」と平行して「幼稚園唱歌集」の編纂も行われていた。この唱歌集の緒言をみると

「一、本編ハ児童ノ始メテ幼稚園ニ入り、他人ト交遊スル事ヲ習フニ当リテ、嬉遊唱和ノ際、自ラ幼徳ヲ涵養シ、幼智ヲ開発センガ為ニ…」

となっている。嬉遊唱和という言葉があるが、伊沢修二は前述したとおり愛知師範学校校長時代に唱歌と嬉遊を重要視し、実践している。このことから幼児には唱歌だけでなく嬉遊をすることにより、人との交わりがよくなると思ったのではないだろうかと考える。幼稚園を創設したフレールも幼児期に遊戯の大切さを唱えている。

唱歌のとき楽器の伴奏があれば、子どもたちの心を感動させるので、箏、胡弓、あるいは洋琴、風琴などを備えたほうがよいというようなことも緒言で述べている。この「幼稚園唱歌集」には「小学唱歌集」より取られたものもある。第1曲目は「心ハ猛ク」である。その歌詞は“ココロハタケク、キハツヨク”という歌いだしになっており、はやくから精神を強調するような面が伺える。

この曲「心ハ猛ク」を(譜例4)にて紹介する。

## (譜例 4)

## 第一 心は猛く



1. ココロ ココロ ロからレ ハヒキ ナツチ ケケチ ナツチ キヨい ハクキ ツマモ ヨナシラ クレ  
2. ゴあ へる ル そき に うぞ くれ む ひと フ もる らふ とし ま い ふ ぞら

伊沢修二は唱歌が徳性の涵養に役立つことを前述の「小学唱歌集」の緒言にあげているが、それについて実際の例をあげ説明している。「凡ソ愛ハ徳育上缺ク可ラザル所ナリ。故ニ幼年ヨリ事物ヲ愛シ朋友ヲ愛スルノ心情ヲ養ハザルベカラズ。」という点において、これを養う歌として「霞か雲か」の例を挙げている。このような形を全部で11項目をあげ、それに合う歌の例をあげている。

「小学唱歌集」は小学校の唱歌教材であったばかりでなく、一般家庭にまで普及したということである。

学校に唱歌の授業を興した伊沢修二のエネルギーはどれほどであったろうか。彼の業績は実に偉大であり、今日までわが国に音楽の授業科目があるのも伊沢修二の恩恵に浴するものである。

### 3. 明治期から大正期までの唱歌集

「小学唱歌集」が刊行されてから、いろいろな唱歌集が刊行され続けた。どの唱歌集で、どのくらい前に何という曲が紹介されたかを知ることができるのは興味深い。ここに唱歌集の一部を紹介する。

「尋常小学読本唱歌」、「尋常小学唱歌」、「新訂尋常小学唱歌」は国定教科書として、後の教科書へつながっていくと考えたので、別に取り扱うこととした。

①「幼稚園唱歌集」これは一部を前述した。明治20年に刊行され、官製の音楽教科書である。伊沢修二とメーソンが編集している。特徴は子どもが遊んでいる時、歌っていたわらべ歌をとり入れている。伊沢は子どもの気持ちや心を大変重要視したと思われる。(譜例5)の「数えうた」の歌詞は「一つとや、人々一日も、忘るなよ、忘るなよ、はぐくみ そだてし、親の恩、親の恩。」原曲は近世俗謡となっていて、子どもにとって歌いやすいが、歌詞は見てわかるように“親の恩”ということばを繰り返し使っていて修身的内容となっている。

(譜例 5)

数えうた

作詞者未詳  
原曲 近世俗謡

ひ と つ と や - - ひ と ひ と  
ひ と ひ も わ す る な よ  
わ す る な よ は く く み そ だ て し  
お や の お ん - - お や の お ん

②「明治唱歌」明治21年、大和田建樹と奥好義共編で第5集まで刊行された。作詞は大和田建樹で作曲は未詳（西洋曲）となっているのが多く、ほとんど外国曲に作詞されており、作曲は奥好義、上真行、辻則承のものもある。最初の教科書検定をパスしたものである。この中の「故郷の空」は今も歌われている曲の一つである。リズムは原曲と多少変え、日本人にあうようになっている。

③「中等唱歌集」明治22年、東京音楽学校編として刊行された。全18曲からなり、ビショップ作曲「埴生の宿」作詞は里見義で原詩にほぼ近く作られているということである。

④「小学唱歌」明治25年、伊沢修二編6巻として刊行された。これは前述した明治14年に刊行された「小学唱歌集」と言葉の上ではやや区別がつきにくいかわからないが、それとは全く別のものである。このとき伊沢修二は民間人であり、これは検定にパスした教科書である。伊沢はわらべ歌をたくさんこの歌集に入れた。このことは伊沢が常に子どもの心情を大切に考えていたといえる。伊沢はこの歌集で作詞も手がけている。この中には稲垣千頴や小山作之助の名前も見ることができる。現在の教科書に載せられている「うさぎ」も見られる。ここでは（譜例6）としてわらべ歌の「かり」を挙げたい。

(譜例 6)

か り

原詞 わらべ歌  
伊沢修二 作曲

か り か り わ た れ  
お お き な か り は さ き に  
ち い さ な か り は あ と に  
な か よ く わ た れ

⑤「新編教育唱歌集」明治29年，教育音楽講習会編として刊行された。検定をうけた民間の教科書で250曲を載せている。「港」や「夏は来ぬ」はよく知られた曲である。

⑥「幼年唱歌」初編（上巻，中巻，下巻）二編（上巻，中巻，下巻）三編（上巻，下巻）四編（上巻，下巻）からなり，明治33年から明治35年にかけて刊行された。編者は納所弁次郎・田村虎蔵で文部省検定済である。教科適用と書いてあるのは，教科書ではなく教材集ではなかったかと思う。曲は「金太郎」「桃太郎」「花咲爺」「舌切雀」など御伽噺を題材にしたものが多く見られ，子どもの好みを重視し，口語で書かれていて，やさしく歌えるようになっている。作曲はほとんど納所弁次郎や田村虎蔵の名前が見られ，作詞は石原和三郎や田辺友三郎の名前がみられる。子どもの絵が書かれた表紙も人気があった一つといわれている。今の教科書にも載っているわらべうた「ひらいたひらいた」も載せられている。

⑦「女学唱歌」明治33年山田源一郎編で第1集，第2集が刊行された。これには大和田建樹作詞，メンデルスゾーン作曲「琴の音（おおひばり）」が載せられている。女学校用の唱歌教材集となっていた。

⑧「重音唱歌集」明治33年，小山作之助編で第1集，第2集が刊行された。合唱曲のほか輪唱曲が載せられている。ハーモニーを学ぶ為の重要な教材集ではなかったかと思う。

⑨「中学唱歌」明治34年，東京音楽学校編として刊行された。中学生の唱歌32曲。ここには鳥居枕作詞，滝廉太郎作曲「箱根八里」や日本の名曲である土井晩翠作詞，滝廉太郎作曲「荒城の月」などが載せられている。

⑩「幼稚園唱歌」明治34年，滝廉太郎編で幼児向けの唱歌集で全20曲載せられている。滝廉太郎自身の曲も17曲載せられている。代表的な歌は東くめ作詞・滝廉太郎作曲「お正月」である。また唱歌集では始めて全曲に伴奏をつけたということで，作曲家滝廉太郎の実力を見ることができたのではないかと考える。

⑪「少年唱歌」明治36年に刊行された。加藤義清作詞・フォスター作曲の有名な「春風（主人は冷たい土の中に）」が載せられている。また桑田春風作詞・田村虎蔵作曲「虫の楽隊」という曲があるが，その2番の歌詞は「鈴虫・松虫・くつわ虫や，蟋蟀・馬追・鐘つき虫の，節のさまざま，歌に囃子に。ちんちろりん，ちんちろりん，すいっちょ，すいっちょ，がしゃがしゃ，がしゃがしゃ，がしゃがしゃ，がしゃがしゃ。」となっており，後で述べる「尋常小学読本唱歌」にでてくる「虫の声」の歌詞によくにているのがおもしろい。擬音が子どもたちに新鮮味を与え，どんなに喜んで歌ったのだろうかと思わせる。

⑫「中等教育唱歌集」明治40年，山田源一郎編として刊行された。33曲あり，曲は全部外国ものである。たとえば犬童球溪作詞・オードウェイ作曲「旅愁」犬童球溪作詞・ヘイス作曲「故郷の廃家」小松玉巖作詞・ホラティウス作曲「漂流の船（樅の木）」など載せられている。

⑬「大正幼年唱歌」大正4年，小松耕輔，梁田貞，葛原滋共編で刊行された。題材は子どもに人気があったと思われる「電車」を載せている。

⑭「大正少年唱歌」大正7年，小松耕輔，梁田貞，葛原滋共編で，これは小学校上級用として刊行された。葛原滋作詞・梁田貞作曲の「とんび」「羽衣」などの曲が載せられている。

わが国の唱歌教育について（山下恭子）

⑮「セノオ楽譜」大正2年ごろ、妹尾幸陽が刊行。「眠りの精」「シューベルトの子守歌」「ブラームスの子守歌」「浜辺の歌」など名曲が載せられている。

ここまで大正初期までに刊行された唱歌集をあげてみた。その他昭和初期までには多くの唱歌集は刊行されているが、枚挙にいとまがない。

#### 4. 「尋常小学読本唱歌」, 「尋常小学唱歌」, 「新訂尋常小学唱歌」

前述では様々な唱歌集を挙げた。その間「尋常小学読本唱歌」, 「尋常小学唱歌」は刊行されていたのだが、今日の音楽教科書の源となったものは、「尋常小学読本唱歌」, 「尋常小学唱歌」, 「新訂尋常小学唱歌」といえるのではないかと思いここで取り出すことにした。いずれも文部省が国定教科書として刊行したものである。

「尋常小学読本唱歌」は小学校国語教科書であった「尋常小学読本」の中の韻文に作曲された歌を編集したもので、文部省編として明治43年に刊行された。編集委員として上真行, 小山作之助, 島崎赤太郎, 楠美恩三郎, 岡野貞一, 南能衛らの名前を見ることができる。歌詞は読本の中のものであるから、作詞者はなく、外国曲がないという特徴がある。

文部省が著作権を有し、文部省唱歌と呼ばれるようになった。この中には「春が来た」, 「虫のこえ」, 「我は海の子」, 「富士の山」, 「夕やけこやけ」, 「デンデンムシムシ」などなじみ深い曲がある。

俗にハナハト読本とよばれている「尋常小学国語読本巻一」の中の「デンデンムシムシ」のところをみると

デンデンムシムシ カタツムリ, アタマガアルカ, メガアルカ,  
ツノダセ, ヤリダセ, アタマダセ

となっている。

次に「我は海の子」の唱歌は、7番まであり、世界に誇れる日本の海軍が海洋国日本を守るという力強い内容である。1番から3番までは今の教科書にも載っているのので6番と7番までを紹介する。

6. 浪にただよふ冰山も、来らば来れ、恐れんや。

海まき上ぐるたつまきも、起らば起れ、驚かじ。

7. いで、大船を乗出して、我は拾はん、海の富。

いで、軍艦に乗組みて、我は護らん、海の国。

この「尋常小学読本唱歌」には自然や動物を題材にしたものの他、「出征兵士を送る」など軍国主義的なものや修身的なものを題材したものもある。

続いて文部省は各学年配当の唱歌集編集に着手し、「尋常小学唱歌」を明治44年から大正3年に

かけて刊行した。第六学年の教科書が刊行されたのが大正3年である。この国定教科書は国家の立場で作詞・作曲ともその道の最高権威者を選んだ。作詞委員は芳賀矢一、上田万年、尾上八郎、高野辰之、武島又次郎（羽衣）、八波則吉、佐々木信綱、吉丸一昌、

作曲委員は湯原元一、上真行、小山作之助、島崎赤太郎、楠美恩三郎、岡野貞一、南能衛、田村虎蔵であった。これらの委員の中には「尋常小学読本唱歌」の編集に関わった人物も数人見ることができ。歌が作られる場合、作詞が先か作曲が先かという問題があるが、この唱歌は作詞の後で作曲され、のびのびとした曲ができたと評価された。「尋常小学唱歌」第一学年用の緒言では

- 一、本書ハ本省内ニ設置セル小學校唱歌教科書編纂委員ヲシテ編纂セシメタルモノナリ。
- 二、本書ノ歌詞中、尋常小學読本所蔵以外ノモノニ就キテハ、修身・国語・歴史・地理・理科・実業等諸種ノ方面ニ涉リテ適當ナル題材ヲ求メ文體用語等ハ成ルベク讀本ト歩調ヲ一ニセンコトヲ期セリ。
- 三、本書ノ曲譜ハ排列上其ノ程度ニ就キテ多少難易ノ順ヲ追ワザルモノナキニアラズ。是組ノ歌詞ニ性質上已ムヲ得ザルニ出デタルナリ。

明治四十四年二月 文部省

となっており、著作権も文部省として、かなり力を入れたと思われる。各学年20曲、ただし第五学年は21曲、第六学年は19曲となっている。第1学年の第1曲は「日の丸の旗」である。これは小学1年から、忠君愛国の国家意識を持たせるためであったのだろうか。第20曲「菊の花」の1番の歌詞は「見事に咲いた、垣根の小菊、一つ取りたい、黄色な花を、兵隊遊びの 勲章に」まさに国家主義、軍国主義が感じられる歌詞である。「桃太郎」「花咲爺」など童話を題材にしたものも見られるが、これらの曲はすでに「幼年唱歌」の中で見られ、おそらくその中から取られたものではないかと考える。また「青葉」「雲」「雪」「朧月夜」など季節を題材にした曲もみられる。こういう曲を載せたということは、児童に心情の面もある程度考慮したのではなかと思われる。この国定教科書は明治44年から昭和6年までおよそ20年間という長い期間使用された。

次に昭和7年に「新訂尋常小学唱歌」が刊行された。編集責任者は信時潔、片山颯太郎らで、作詞では井上赳、作曲では信時潔のものが多く見られる。「尋常小学唱歌」の緒言を前述したので、「新訂尋常小学唱歌」の緒言も紹介する。

- 一、本書ハ音楽教育ノ進歩ト時代ノ要求トニ鑑ミ、從來本省著作ニ係ル「尋常小學唱歌」ニ改訂ヲ加ヘタルモノナリ。
- 二、本書ハ每卷二十七章トシ、取扱者ニ選擇ノ餘地ヲ與ヘタリ。
- 三、本書ノ歌詞ハ、舊歌詞中ノ適切ナルモノ、新作ニ係ルモノ、及ビ尋常小學國語讀本・尋常小學讀本中ノ韻文ノ一部ヨリ成ル。
- 四、本書ノ歌詞ハ努メテ材料ヲ各方面ニ採リ、文體・用語等ハ成ルベク讀本ト歩調ヲ一ニセン

コトヲ期セリ。

五、本書ノ教材排列ハ強ヒテ程度ノ難易ノミニヨラズ、一面季節ニツキテ考慮セリ。

六、本書ハ取扱者便宜ノタメ、唱歌曲ノミノ楽譜ヲ掲ゲタルモノト、伴奏附ノ楽譜ヲ掲ゲタルモノト、二種類ヲ作製セリ。教授ニ際シテハ其ノ何レヲ採用スルモ可ナリ。

昭和七年三月

文部省

この「新訂尋常小学唱歌」は「尋常小学唱歌」の20曲から数曲削除し、新に曲を加えて各学年27曲へと曲数が増えた。児童の身近な生活を取り入れた教材が増加しているが、学年が進むにつれて児童の生活にあったものが減少し、徳育内容や国家的な曲は温存された。「新訂尋常小学唱歌」の第1学年の第一曲はやはり「日の丸の旗」を載せている。「一番星みつけた」は児童の心情を組み入れた曲のひとつであろう。新訂版で「牧場の朝」は評判がよかった曲であったということである。

「新訂尋常小学唱歌」の曲は全曲単旋律であるが、第6学年の「スキーの歌」は最後の3小節が2部合唱の形をとっている。また、外国語は使用しないこととなっていたようだが、この曲だけは“スタート”や“ストック”ということばが使われている。この教科書は緒言からもわかるとおり、歌唱曲のみの楽譜と伴奏付の楽譜を作成し、どちらを採用してもよいこととなっていた。筆者は歌唱曲のみの楽譜しか手元になく、伴奏付の楽譜がどのようになっているか興味があるところである。

学年が進むにつれ徳育的、国家的な内容の曲が温存されている点を述べたが、その中の一部を歌詞と（譜例7）および（譜例8）によって紹介する。

第5学年「水師營の會見」の九番の歌詞。

九、『さらば』と、握手ねんごろに、分かれて行くや右左。砲音絶えし砲臺に  
ひらめき立てり、日の御旗。

第6学年「我等の村」の四番の歌詞。

四、ここぞ我等の生まれし處。ここぞ我等の育ちし處。やがて我等の力によりて、  
國のほまれとなすべき處。

「新訂尋常小学唱歌」の復刻版を手にすることができたので、各学年の曲について調子、拍子、音域について調べてみた。それは〔表1〕のとおりである。

(譜例 7)

水師營の會見

♩=120

二三四五六七八九

リヨにノキカふリコサ  
 ジュはギのタタリヤウ  
 ンにイのチのヤウ  
 カひヤツシヤテタわヒヤ  
 イと一きダガルすク  
 ジャウもハはシチゴにユ  
 ヤなオふけイそトあネ  
 クつゴ一ヒれモまん  
 ナめソのイぞニリゴ  
 リのカとデレシあロ  
 テきニもヌにテリニ

二三四五六七八九

テだミかコシナグワ  
 一んメ一ノしホ一カ  
 キぐグたハをモンレ  
 ノんミる一一のヲ  
 シアフこメえツおエ  
 一とカとシタキキク  
 グもキもノをヌにヤ  
 スいオウせよモシミ  
 テちホちンろノたダ  
 ツジキとトウコガヒ  
 セるミけ一ベタヒダ  
 ルくノてニリリテリ

(譜例 8)

我等の村

♩=66

一カスムヤマベ一ハムラサキ一ニホヒノ  
 二いでてたがや一すをとこの一ためにそ  
 三トメルマヅシ一キサマザマーナレドム  
 四ここぞわれら一のうまれし一ところこ

ベハコガネノナノハナザカリ一ハ  
 らのひばりはひねもすうたひ一う  
 ラアイスルココロハヒトツ一オ  
 こぞわれらのそだちしところ一や

*poco rit.* *a tempo*

[表 1] 「新訂尋常小学唱歌」

第 1 学年		曲数	割合(%)
調 子	ニ長調	11	41
	ハ長調	10	37
	ト長調	5	19
	陰音階	1	4
拍 子	2/4	21	78
	4/4	6	22

第 2 学年		曲数	割合(%)
調 子	ハ長調	13	48
	ト長調	6	22
	ニ長調	6	22
	ハ長調	2	7
拍 子	2/4	14	52
	4/4	12	44

わが国の唱歌教育について (山下恭子)

音 域	ニ̣〜ニ̣	12	44
	ヘ̣〜ニ̣	10	37
	ト̣〜ニ̣	3	11
	ニ̣〜ロ̣	1	4
	ロ̣〜ロ̣	1	4

音 域	4/8	1	4
	ハ̣〜ニ̣	10	37
	ニ̣〜ニ̣	9	33
	ヘ̣〜ニ̣	5	19
	ト̣〜ニ̣	3	11

第3学年		曲数	割合(%)
調 子	ト長調	10	37
	ヘ長調	6	22
	ニ長調	6	22
	ハ長調	3	11
	イ長調	1	4
	陰音階	1	4
拍 子	4/4	14	52
	2/4	9	33
	3/4	2	7
	4/8	1	4
	2/2	1	4
音 域	ニ̣〜ニ̣	13	48
	ハ̣〜ニ̣	6	22
	ハ̣〜ホ̣	3	11
	ニ̣〜ホ̣	2	7
	ト̣〜ホ̣	1	4
	ホ̣〜ホ̣	1	4
	ロ̣〜ホ̣	1	4

第4学年		曲数	割合(%)
調 子	ト長調	9	33
	ヘ長調	7	26
	ハ長調	5	19
	ニ長調	4	15
	変ロ長調	1	4
	ホ短調	1	4
	拍 子	2/4	13
4/4		11	41
4/8		2	7
6/8		1	4
音 域		ニ̣〜ホ̣	9
	ニ̣〜ニ̣	8	30
	ハ̣〜ニ̣	7	26
	ハ̣〜ハ̣	2	7
	ハ̣〜ホ̣	1	4

第5学年		曲数	割合(%)
調 子	ヘ長調	6	22
	ト長調	6	22
	ニ長調	4	15
	ハ長調	3	11
	イ長調	2	7
	ホ長調	1	4
	変ロ長調	1	4

第6学年		曲数	割合(%)
調 子	ト長調	7	26
	変ホ長調	6	22
	ハ長調	4	15
	ニ長調	3	11
	イ長調	2	7
	ヘ長調	2	7
	変ロ長調	2	7

	ホ短調	2	7
	ト短調	1	4
	ハ短調	1	4
拍子	4/4	19	70
	2/4	5	19
	3/4	2	7
	6/8	1	4
音域	$\overset{\cdot}{\text{ニ}} \sim \overset{\cdot\cdot}{\text{ホ}}$	9	33
	$\overset{\cdot}{\text{ハ}} \sim \overset{\cdot\cdot}{\text{ホ}}$	6	22
	$\overset{\cdot}{\text{ハ}} \sim \overset{\cdot\cdot}{\text{ニ}}$	6	22
	$\overset{\cdot}{\text{ロ}} \sim \overset{\cdot\cdot}{\text{ホ}}$	4	15
	$\overset{\cdot}{\text{ニ}} \sim \overset{\cdot\cdot}{\text{ニ}}$	2	7

	ホ短調	1	4
拍子	4/4	12	44
	3/4	9	33
	6/8	3	11
	2/4	2	7
	2/2	1	4
音域	$\overset{\cdot}{\text{ニ}} \sim \overset{\cdot\cdot}{\text{ホ}}$	6	22
	変ロ $\overset{\cdot\cdot}{\sim}$ 変ホ	6	22
	$\overset{\cdot}{\text{ニ}} \sim \overset{\cdot\cdot}{\text{ニ}}$	5	19
	$\overset{\cdot}{\text{ハ}} \sim \overset{\cdot\cdot}{\text{ホ}}$	4	15
	$\overset{\cdot}{\text{ハ}} \sim \overset{\cdot\cdot}{\text{ニ}}$	4	15
	変ホ $\overset{\cdot\cdot}{\sim}$ 変ホ	1	4
	変ロ $\overset{\cdot\cdot}{\sim}$ 変ロ	1	4

次にこの表では見えてこない部分について述べる。小節数に関しては16小節でできているものが圧倒的に多く、「出征兵士」は32小節という多い小節でできている。曲の出だしのリズムは♪♪♪♪や♪♪♪♪♪のような付点のリズムで始まるものが多く、概して単純なリズム構成になっている曲が多い。アウフタクトの曲は第4学年以上に見られ、強弱記号や曲想記号は第5学年以上にみられ、高学年ではより豊かな音楽表現を目指したのではないかと察する。速度記号は全曲つけられている。

## 5. 教授法について

教育に関しては教材がどのようなものであったかということとあわせて、教授法はどうであったかということを知ることは重要なことである。伊沢修二はアメリカ留学前の愛知師範学校長時代すでに「教授真法」を出し、そのなかで、教授法の第一原則は基本となることから始めることなどを述べ、ベスタロッチやフレーベルの実物教授の方法論を高く評価していたという。帰国した伊沢修二とメーソンは唱歌教授法の研究も進めて、わが国の唱歌教授の基礎をつくった。

音楽取調掛は明治16年9月に音楽伝習上の必要な書として「音楽指南」を出している。これは教授法についての書である。これはメーソン著「National Music Teacher」を内田弥一が訳したものである。ここには学習事項とその内容が示されていて、今日でいう学習指導要領みたいなものでなかったかと思う。これには唱歌口授の目的、唱歌口授の方法、楽典の事項などが盛り込まれている。唱歌を口授で教育するときは、おうむ返しの歌をさせる。教師は真の音楽的表現をし、模範的な演奏を子どもにきかせることの大切さを述べている。

そして聴くことの大切さ、つまり耳の訓練をし、楽譜を見て歌う力をつけることも述べている。

音楽教育は徳育、健康の面からの必要性を伊沢修二は述べたが、これを見ると美的情操を伸ばす点が伺えるようである。また教科細目を見ると数字譜練習で長音(二分音符)、短音(四分音符)の区別をしたり、拍子や記譜法、移調など楽譜上の約束事を重要視している。教師が音楽的表現をすることが述べられている点は、子どもに美を感得させる伊沢の願いではなかつたらうか。

教師が範唱して、子どもが模唱するスタイルは今日でも行われているが、これは有効な教授法である。曲の趣を即座に子どもがつかみ、歌えるようになるからである。この教授法はずっと貫かれている。

つぎに「尋常小学唱歌」が出された明治4年から昭和6年までの教授法はどうであつたらうか。この時代大きな出来事は、大正デモクラシーである。唱歌教育から音楽教育への模索が始まった時で新しい教育内容が試みられた。青柳善吾は「音楽教育の目的は美育で、新しい音楽教育は美の啓培と創造とによって行われるべき」という見解を述べている。童心を念頭において授業を考え、設計すべきであるという論が多く出てきた。従来徳育から美育へという傾向が見え始めたのではないかと考える。

山本壽(広島大学附属小教諭兼訓導)は「尋常小学唱歌」がどれくらい歌われていたかを広島大学附属小学校内の学校教育研究会の月刊誌「学校教育第235号」の中で、低学年の唱歌教授に関して視察したことを述べている。その一部を引用する。

#### 『尋常小学校1年「牛若丸」の新教材』

児童 先生のマーチに足をそろえて教室に入る。先生のマーチが終ると歩調を止めオルガンの合図で一斉に正面へ向きをかえ、先生に敬礼して一同座席につく。

1. 児童着席 先生「日の丸の旗」をひきはじめた。児童うたう。
2. 先生「兵隊」をひく。子どもうたう。
3. 予備練習 発声
4. 主眼点「牛若丸」の新教授に移る。師「今日は牛若丸のお唱歌を教えてあげましょう。まだ少し早い(読本でまだ習わないという意)ののですが、運動会でこの遊戯を致しますので、それで今日はこれをお習い致します。では先生がウタを書きますから、静かに読んでごらんなさい。」
5. 歌詞提示 (詳細については略)
6. 斉読 (詳細については略)
7. 先生の範奏(オルガン)その後うたをくりかえし練習
8. 歌詞の説明、師「京の五條の橋の上とは、京都の五條橋のこと。(ここで先生が絵掛図を示した。こどもらが一斉にこれを注視した。今までざわめいていた教室がおのずから水を打った如く静粛になったことを見、先生は説明をつづけた。  
師「これは誰？」 児「弁慶」  
師「これは誰？」 児「牛若丸」(あとの問答省略)

この後男児だけ、女児だけの斉唱、全体で斉唱。

というように授業が展開されている。

この授業では最初、既習曲と思われる曲の復習をすることにより動機付けをしている。「日の丸の旗」と「兵隊」の曲は国家意識を持たせるために、いつも歌わせていたかもわからない。これは筆者の単なる憶測である。この既習曲を歌う方法は今日でもよくとられている。しかし視察した山本壽は「日の丸の旗」と「兵隊」は「牛若丸」との関係がないので、動機付けになっていないと述べている。筆者が面白いと思ったのは、先生が弾くマーチにあわせて教室に入ること。教室を移動して別の教室で授業が行われていたのだろうか。音楽の授業の時は常にマーチにあわせて歩調を整えることをしていたのだろうか。マーチにあわせて歩調を整えることは拍感を養う上で有益だったにちがいがなかったと考える。また教師の発問は「～してごらんなさい。」であり、子どもは常に受身的である。

明治期からヘルバルトの5段教授法が流行していたが、唱歌では3段教授法が行われていた。つまり

- ① 予備 発声、音階、音程などの練習
- ② 示範 唱歌を範唱指導
- ③ 練習 口授法で模唱させ、全体あるいはグループで練習

というスタイルで、大正中期ごろまでこの方法が行き渡り、児童の音楽の水準が進歩したといわれた。先の山本壽が視察した授業をみてもこの3段階教授法によっているとみなすことができる。

昭和7年から昭和16年国民学校令が公布されるまでの「新訂尋常小学唱歌」の時代はどうだったか。昭和6年に満州事変、昭和7年満州国建国、昭和8年国際連盟脱退、昭和11年2・26事件、昭和12年日華事変、昭和14年大二次世界大戦開始とめまぐるしい変化の時である。教育は戦争へむけての歩みを増幅させていった。

音楽の面では昭和8年に音楽週間がはじめられ、昭和12年には音楽報告週間、児童唱歌コンクール、五万人の大合唱などが催されている。しかしこれらは非常時にむけての精神的な団結のためだったという。教授法として新しいものが出てきたかどうかまた当時の授業事例の資料をさがすことができなかった。しかし唱歌教育から音楽教育への志向が進んだ時期である。鑑賞指導、創作指導、器楽指導、音感教育など実践的な研究が行われた。

昭和16年国民学校令が施行されてからは「唱歌」は「芸能科音楽」へと改められることとなった。

## 6. ま と め

音楽教育の創設期から昭和初期まで、述べてきたが、国歌権威に対して、民衆一人ひとりの自覚と権利が主張された大正デモクラシーと童謡運動は見逃すことができないものである。しかし詳細についてはここではふれない。

## わが国の唱歌教育について (山下恭子)

唱歌教育は昭和初期まで明治時代の生き方を踏襲してきて、「新訂尋常小学唱歌」の時代でもさほどかわらなかったといえる。大正14年ラジオ放送が開始され、昭和初期には国民生活において、洋楽がラジオとレコードによって、著しく普及した。また享樂的な流行歌がレコード企業の競争とともに、全国的に広まった。しかし日華事変後抑圧され、かわりに平易な国民歌が普及した。また吹奏楽や合唱の実践も行われていた。

子どもたちは学校以外では、音楽をラジオやレコードで楽しんでいたようである。学校で学ぶ「尋常小学唱歌」や「新訂尋常小学唱歌」は子どもたちにどう感じられていたのだろうか。楽しい教科としてとらえられていたのだろうか。当時子どもだった人が、学校で習った唱歌をどのくらい覚えていて、それを歌えるだろうか。また実際どういう教授法であったか。

筆者はこの件に関して、聞き取り調査をする機会を持つことができた。それは次のとおりである。

## [聞き取り調査について]

1. 調査日：平成17年9月23日
2. インタビューイー：大正11年生，82歳，女性
3. 方法：「新訂尋常小学唱歌」を1年から6年までの曲を一曲ずつ筆者が歌って、覚えているかどうかを尋ねた。知っている時は一緒に歌ってもらった。また教授法や習っていたとき歌詞の内容などについても尋ねた。

結果は [表2] のとおりである。各学年27曲で、数字は曲数を表す。

[表2]

	覚えている。	うっすら覚えている。	覚えていない・知らない。
1年	16/27	6/27	5/27
2年	14/27	3/27	10/27
3年	15/27	4/27	8/27
4年	8/27	7/27	12/27
5年	13/27	3/27	11/27
6年	14/27	0/27	13/27

このデータから全曲(162曲)を通して、よく覚えている曲あるいはうっすらおぼえている曲の合計の割合は63%であった。知らない曲、覚えていない曲は授業で習わなかった可能性も考えられる。

インタビューイーが特に印象深く残っている曲をあげてもらった。はじめに1年の時習った「兵隊さん」で、これはものすごく流行したそうである。

その歌は(譜例9)のようになっている。

「鐵砲かついだ 兵隊さん、足並みそろへて 歩いてる。とっとこととこ 歩いてる。  
兵隊さんは きれいだな。兵隊さんは 大すきだ。」

(譜例 9)

兵 隊 さ ん

♩ = 120

一 ツツ バウ カ ツ イ ダ ヘイ タイ サン  
二 おう まに の つ た ー へい たい さん

ア シ ナ ミ ソ ロ ヘ テ ア ル イ テ ル  
す ー な を け た て て か け て く る

ト ツ ト コ ト ツ ト コ ア ル イ テ ル  
ば つ ば か ば つ ば か か け て く る

ヘイ タイ サン ハ キ レ イ ダ ナ  
へい たい さん は い さ ま し い

次に1年「電車ごっこ」。これは遊びの中でよく歌っていたそうである。縄を輪にしてその中に人が入ってごっこあそびをする。こういう遊びは今でもみられるが、電車にする素材はもちろん違う。次に「一番星みつけた」。この歌もよく歌っていた。空を見上げてうたっていた。おそらく夕方見える金星を見て歌っていたのだろうと察する。

次に6年の「四季の雨」。これは遊戯をしていたそうで、その遊戯をしてくれた。この曲は(譜例10)にあげる。

(譜例10)

四 季 の 雨

♩ = 69

フにチキ ルぱりく トかちだ モにりに ミすッさ ー ー エグッむ じるケキ ハなアふ ルつキゆ ノのノの アあアあ ー ー めめめめ

ミのこま ズほノど ニしハの ヲざコな チーノざ カなミさ クにちに ナしノさ ミらニや ー ー ナつッさ クゆマヤ バなにと

ケなイふ アゴロけ ルリサゆ トとまく パしッよ ー ー カばマば りしニか オほッお モしメと ハら一づ セせナれ ー ー シー テててて

フにチキ ルぱりく トかちだ モにりに ミすッさ ー ー エグッむ じるケキ ハなアふ ルつキゆ ノのノの アあアあ ー ー めめめめ

歴史の教科書に載っているような歌はしっかり覚えているということを知ることができた。音楽と他の教科を関連させることは、「尋常小学唱歌」からなされていた学習法であった。

次に歌詞のことについて尋ねた。歌詞のことなど何がなんだかわからずに歌っていた。先生は歌詞の説明などしてなかった。しかし歴史で習ったものや国語で習ったものは、意味がわかって歌っていた。ということであった。難解な歌詞があるのは確かである。

このことから当時の子どもにとっては、ことばの意味よりもメロディやリズムの面をよく感じ取っていたのではないかと思う。徳性の涵養を目的とした音楽教育は、歌詞がもつ意味というのが重要と思うが、歴史や国語で習った以外の修身的なもの忠君愛国的なものは、歌詞の説明がないかぎり、小学生が理解するにはやはり無理であったろうと考える。

教授法に関しては、アーアーアーによる発声練習。それから歌をうたう。これは口授法だったようである。先生が1フレーズ弾きながら歌いそれをみんなが模唱するという形だったそうである。明治からずっとこの3段教授法は続いていたことがわかる。

評価に関して尋ねてみた。試験に関しては5～6人ずつ前にでてうたう形だった。先生はどうやって個々の歌を聞いていたのだろうか？という話であった。

女学校では音楽専門の先生がいて、発声とコールユーブンゲン、唱歌を習っていた。コールユーブンゲンは厳しく教えられ、専門的であった。試験は1人ずつ歌わされた。

小学校5年6年の時、合唱部が作られて20人くらい部員がいた。合唱部では「もみじ」や「ふるさと」などを練習して、女学校で催されたステージで発表をした。唱歌の時間はとても楽しく、他の友だちも楽しんでた。この聞き取りで、各曲を歌っていくうちに、これらの唱歌はどれでも似たような曲であり、変化がないねというインタビューイーの感じであった。このことは「尋常小学唱歌」や「新訂尋常小学唱歌」の旋律やリズムが単純であるといえる。また反対に今日の世界の中に存在している音楽が複雑で刺激的なものがいかに多いかということもできる。

以上のようなインタビューであったが、たった一人にしかインタビューしていないので、データとしては信頼できるものではない。しかしある程度当時のことがわかったのではないかと思う。昭和16年国民学校令が出されてから、それまで「唱歌」といっていたものが「芸能科音楽」という呼び方にかわり、教育内容もかわっていく。世の中がますます戦争へという気運が増して行くのである。

教育の近代化にむけて、明治期から欧米諸国に追いつこうと必死で取り組んできた姿が見え、音楽教育の目的は時代により変化したが、今日の音楽教育へと導かれた感がする。

### 参 考 文 献

- 1) 信濃教育会『信濃教育 第972号』（信濃教育会，昭和42年）
- 2) 伊沢修二・山住正己『洋楽事始』（平凡社，1987）
- 3) 東京芸術大学百年史編集委員会『東京芸術大学百年史』（音楽之友社，昭和62年）
- 4) 文部省『新訂尋常小学唱歌 全6冊（復刻版）』（大日本圖書株式会社，昭和7年）
- 5) 金田一春彦・安西愛子『日本の唱歌（上）』（講談社，昭和54年）
- 6) 金田一春彦・安西愛子『日本の唱歌（中）』（講談社，昭和54年）
- 7) 広島大学附属小学校内社団法人学校教育研究会『学校教育第十四卷（上）（復刻版）』（冬至書房新社，昭和58

- 年)
- 8) 広島大学附属小学校内社団法人学校教育研究会『学校教育第十四卷(下)(復刻版)』(冬至書房新社, 昭和58年)
- 9) 広島大学附属小学校内社団法人学校教育研究会『学校教育第十九卷(上)(復刻版)』(冬至書房新社, 昭和58年)
- 10) 広島大学附属小学校内社団法人学校教育研究会『学校教育第十九卷(上)(復刻版)』(冬至書房新社, 昭和58年)
- 11) 山中恒『ボクラ少国民と戦争歌』(音楽之友社, 昭和60年)
- 12) <http://homepage1.nifty.com/zpe60314/jinjyo2.htm>

### 転載譜例

譜例1, 譜例2 「洋楽事始」(平凡社)

譜例3 「幼児のうた楽譜集 みんなでうたおう」(東京書籍株式会社)

譜例4 「東京芸術大学百年史」(音楽之友社)

譜例5, 譜例6 「日本の唱歌(上)」(講談社)

譜例7, 譜例8, 譜例9, 譜例10 「新訂尋常小学唱歌(復刻版)」(大日本図書株式会社)